

王法不思議

山田虛室

瘡高い聲に自己陶醉しながら、讚美歌を唄はなければ、感激を覺えない種類の人もあらうし、陰鬱そのものゝ様な、木魚の伴奏がないと、しつくり落ち付けない種類の人もあらう。さうかと思へば、昔ながらに淨白な束帯を着け、黒漆の木履を應場にはいて貰はないと、莊重さを感じにくい種類の人もあらう。

又基督教徒だと自らも人も許して居るのに、妙に白隠や仙崖の禪畫に魅惑を感ずる先生もあれば、神統家だと言ふのに、不思議に佛像を愛好し、又相當其の方面の觀識眼を備へて居る變り種もある。さうした生活様相は、各自の趣味と藝術觀に據るものであつて、他律的にどうする事も出来ないものであらう。又さう他律的にやかましく言はねばならぬ程の重大問題でもないと思ふ。然るに世間には何時の時代でもさう言ふ、謂はゞ宗教の第二義第三義的付屬物を楯として兎角の論議が絶えない。公葬は神道ですとかせぬとかのやうに。

ところでさうした末梢的雰圍氣にばかり捉はれてゐると、つい肝心な宗教自體の生命を失つて了

ふことになる。そこでさう言ふ宗教的形骸を、出来上つたら捨て出来上つたら捨て、常に生命そのものを凝視し、その把握にのみ直行しやうとするものに禪がある。そのために折々猫が首を斬られたり、草庵が焼かれたりする。

蓋し佛教の眞諦たるや、釋尊成道の時の一句子、「奇哉奇哉一切衆生悉皆具有如來之智慧德相」の十八字に盡きるのではなからうか。八萬四千の法門と言ふも、五千四十餘卷と言ふも、畢竟この一句子の展開に過ぎない。五時と言ふも八教と言ふも、所詮この一句子の止揚に外ならぬ。

達磨大師が鯨波萬里を越えて中國へ來られた時、中國の佛教界はこの五千四十餘卷と八萬四千門で汎濫してゐた。八教の判釋も六宗の教相も、これら夥しき經論の翻譯と整理に憂身をやつすあはたゞしさでしかなかつた。之を見て愕然とし啞然としたのは、蘆葉大師であつた。彼は全く「やう言はんわ」とつぶやいたであらう。そして結局練り出したものが、「直指人心見性成佛」と言ふ八字の金看板であつた。釋尊奇哉の一句子を節約すること正に十字の妙諦である。まあそんな七面倒な事を言はずに、膝づめ談判で御相談しやうぢやないか、と言ふのであつた。まあそない帳面づらの取引ばかりせんと、あんたの財布みんなぶちまけて見なはれ、と言ふのであつた。

達磨の禪法は、六祖の廬行者や、八祖の馬大師に依つて略々完成した。そして馬大師をして、ついに即心即佛の一振刀を受用不盡ならしむるまでに至つた。直指人心見性成佛など、八字も使ふの

は勿體ない。衲の佛法は四字あれば事足りると言ふやうに。而も即心即佛と言へば、兎角人の良い大衆は又心とか佛とかに殊勝を求めたがるので、彼は後には非心非佛と改めて了つた。

この即心即佛の公案は、其の嗣鹽官齋安國師の嗣、義空禪師に依つて、我が朝に傳へられる因縁におかれた程有名なものであつた。即ち嵯峨天皇の妃檀林皇后の參じ給ふ所であつて、皇后こそは實に我が國最初の正法の修行者であらせられた。その投機てうけの御歌に

もろこしの山の彼方に立つ雲は

こゝにたく火の煙なりけり

と仰せられて居る。雲即煙、彼即此、佛即心、菩提即煩惱、常に彼方の莊嚴と殊勝を、此處の不全と未完に把握する所に禪の行き方はある。

馬大師の宗旨は更に四轉して、臨濟に到つて、佛法多子なきことを印破され、喝の一字に説盡される運命におかれた。即心即佛を節約する事更に三字である。蓋し喝の一字は最早節約の餘地なき言詮の最後のピリウドであつた。それは同時に總てを包容する喝であり、又總てを拒否する喝であつた。思ふに生命の宗教は、常にかうした簡明の一路にその新鮮さを持續するより外、生きる道はなかつたであらう。

されば道元は求法入宋するも、その歸朝に當つては、遂に一物を將來しなかつたと公言する。日

は朝々東に出で、月は夜々西に沈む。只眼横鼻直なる事を認得して人に謾せられざる平明なる心境を傳持したに過ぎない。毫無佛法とは蓋し彼が正直にその寒腸を吐露した告白であつた。

聖徳太子が、篤く三寶を敬せよと宣せられたのは、實にかゝる三寶であつた。日は朝々東に出で月は夜々西に沈む底の佛法であつた。君君たり臣臣たり、父父たり子子たり。法法位に住して世間相常住なる佛法であつた。其れ三寶に據らずんば何を以てか枉れるを直くせんと斷言せられる佛法であつた。之によつてのみ正己正他し得ることの出来る佛法であつた。之なくては社會は混亂し國威も隨つて失墜するであらう佛法であつた。それは、「天子は専ら正法を以て務と爲す。是れ則ち佛教の興隆なり。」と禁秘抄に仰せられた佛法であり、「謂ゆる佛法の説くべき無き之を佛法と名く」と興禪護國論の記す佛法であつた。

「正成座上に居つゝ舍弟の正季に向ひて、抑々最後の一念に依りて善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なると問ひければ、正季からくくと打ち笑ひて、七生まで只同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども我もかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替へて此の本懷を達せんと契りて、兄弟共に差し違ひて同じ枕に臥しにけり。」とは太平記の記す所であるが、正季からくくと打笑ひは實によく利いて居る。常に九品の淨土を一味の人間に明らめ、彼方の紫雲を此處の煙塵に把握する所に禪の生き

方はある。

山岡鐵舟に禪を尋ねた人があつた。鐵舟は禪僧に問ふたらよからうと答へた。客は既に禪僧の禪は聞きつくしたから、貴方の禪を聞かして欲しいと言つた。すると彼は客を道場に案内し一手立合つた。そして室に歸つて徐に言つた。わしの禪はこれだ。

劍客の禪は正に劍に在る。茶人の禪は正に茶に在る。畫人の禪は正に彩管に在り、農夫の禪は耕鋤に在る。資生産業不違脊實相とは法華經の説く所であるが、資源愛護、産業報國の現實を離れて、何處に佛法を求めやう。臣道實踐、大政翼賛の即今を別して、那邊に佛法を行じやう。實に日本精神の顯揚以外に毫も佛法無しである。「釋迦達磨萬一にも大軍を帥ひて我に征め來らば、之を捕へて天子に獻せん」こと、必ずしも關齋の徒を待つには及ばぬ。されば「王法の外に佛事を修す、是れ又近代の弊風なり。予に於ては素より心外に佛法を求めず」とは、花園法皇御日記に記したもう所であつた。

然しそれだからと言つて、修道が不用である、坐禪が無益であると論斷するならば、是亦女さかしきに似て、國をあやまる甚しきものではなからうか。鐵舟の禪は劍にあるが、鐵舟の劍は禪に在つた。利休の禪は茶にあつたが利休の茶は禪に發祥して居ることを知るならば思半に過ぎるものがあらう。

劍道は大切だが修禪は不要と言ふならば、劍禪一致とは言はれぬ。芥道さへやれば別に坐禪の工夫はいらぬと言ふならば、茶禪一味の論理はなり立たぬ。王法の施行を全うしさへすれば、最早や佛法の修行などは不要である。却て王法を染汚するものであると言ふならば、王法佛法一如とは云はれぬ。花園法皇の御日記は更に筆を進めて曰ふ、「徒に心外に佛法なしと稱して修行せざれば、何れの時にか佛性を顯さんや。前の是非に迷ふなり。共に偏執すべからざるなり」と。

誰か裏のない紙をすることが出来るであらうか。誰か裏のない布を織ることが出来るであらうか。誰か裏のない面を刻ることが出来るであらうか。裏のないと言ふ事は實質のないと言ふことになる。表も亦ないといふ事になる。王法は表である、佛法は裏である。表裏全く一體にして分つ可からざるものであるが故に、王法佛法一如とはいふのである。喩を再び面にとるならば、表の天狗をおかめにするのは出来ぬが、鼻を横にして眼を堅につけかへることも出来ぬが、裏は誰の頭でもうけ入れる。男でも女でも老人でも子供でも、佛法はかくの如き無相の一路であり、無礙の大道である。

我が國の古語に心の事をウラと言ふ。ウラやすの舞とは心やすの舞である。ウラおもひとは心思ひである。直指人心と言ひ、見性成佛と言ひ、即心即佛と言ひ、佛法は釋尊成道この方、ウラの探究に終始一貫して居る。佛法はまことに王法の裏であり、王法はまことに佛法の表である。これを

王法佛法一如とは申し上るのである。

原始佛教に三法印と言ふ事がある。諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法則である。法印とは佛法を存立せしめる原則の謂である。佛法の原則は實にそのまゝ宇宙の原則であり、宇宙の原則は又そのまゝ王道の原則でもなければならぬ。

諸行無常とは「唯白骨のみぞのこれるまことにあはれなることども」のみを言ふのではない。動いて止まざる生じて止まざる無常である。實に生成化育、修理固成の盛衰である。寶祚の隆なる事天壤と共に極りなしと仰せられし天壤は、死の如く凝結せる天壤ではなくして、實に無限の發展と活動を約束された天壤である。さざれ石の巖となりて、苔のむす進展を考へられる無疆である。是れ王道に於ける無常法印である。

王法は又決して排他的でない。實に包容性に富んだ無我の大道である。我が國體は古來あらゆる民族を包容し、あらゆる文化を攝取し、今現に大東亞を打つて一丸とする大建設に躍動して居る一つの有機體である。若し夫れ一途に國體を古事記の昔にのみ回顧し、八紘一字の大御心を民族の征伏と解する者があるならば、之こそ國を毒する甚しきものである。これ王道の無我法印であつて、斯の如き似て非なる怖るべき愛國主義者の偏見をたむべく最も必要なる鐵槌である。

西行法師は、伊勢大神宮に參詣して、「何事のお在しますかは知らねども、かたじけなさに涙こ

ぼる」と詠んだ。古來宗教的情操を最もよく表顯した名歌として傳へられて居る。併しそれでよいであらうか。かたじけなきに涙こぼるゝは良いが、何事のお座しますかは知らねどもで良いであらうか。忠勇なる我が將兵が、天皇陛下萬歳を叫んで戰陣に仆れると聞いて居るが、そして常に吾等の感激を新にして居るのであるが、若し夫れその心裡に於て、何事のお座しますかは知らねどもと言ふ忠誠であつたなら、吾人は大いに悲しまざるを得ないのである。兩頭を切斷する事は易いが、一劍天に倚つて寒じき心境を養ふことは難しい。

神勅昭々として皇孫に曰ふ。「此の寶鏡を視まさんこと、當に猶吾を視るが如くせよ」と。寶鏡を見まさむとは、其の形相の六角であるか八角であるか見よと仰せられたのではない。質材が金であるか、鐵であるか銅であるか調べよと言ふ事でもない。實に其の寶鏡に表象される、公明なる神徳を拜し上ることではなくして何であらう。

親房卿はその正統記の一節に言ふ。「鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに是非善惡の姿あらはれずと言ふ事なし。その姿にしたがひて感應するを徳とす。是正直の本源也」と。又言葉を改めて、「中にも鏡を本とし、宗廟の正體と仰かれ給ふ。鏡は明をかたちとせり。心性明かなれば慈悲決斷は其の中にあり」と。されば此の寶鏡を見よと仰せられしは、實に神明の盛徳を拜し上ることであり、天心を把握することであり、人々本具の心性を徹見する事に外ならぬ。

後醍醐天皇は建武二年、禪機全く圓熟し給ひ、投機の偈を大燈國師に示し給ふて曰く、

二十年來辛苦人

迎春不換舊風煙

着衣喫飯恁麼去

大地那曾有塵

と。曾て夢窓を鎌倉より南禪に召し給ひ、三光を出雲より船上に召させられ、紫野の大燈を禁中に請せられては、屢々法要を御諮問遊され、實に這の事の爲に辛苦遊さるゝこと二十年來であらせられた。見性の事實に容易ではない。而も今日大悟の春を迎え給ふに、佛法まことに多子なしであらせられた。茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す。治世安民の御聖業の外別して殊勝のあらせ給ふ筈もない。

只其の結句の越格なる御感懐に至つては、まことに恐懼の限りである。大地何曾有一塵。盡大地土一ナメもないと言ふ廣大なる御境地であらせられた。これ即ち少林大師の廓然無聖の端的であり、本具の大圓鏡智を發得遊されたものであり、神明昭々として一點の塵埃なきを正しく證見遊されたものであつた。大燈は恭しく餘白を汚して上つたことであつた。「老僧恁麼驗、響。」

東嶺禪師は其の無盡燈論に言ふ。「大凡神者心也。心垢滅盡如鏡明了、是謂神。是故神乘以鏡爲表體、心鏡本來清淨常住寂然、是謂國常立尊。心鏡本來圓明無物不現、是謂天照大神。」

東嶺は伊勢の神官の家に生れ、出家して古月白隱兩大家の門を叩き、その蘊奥を盡して後、神宮

の寶庫にこもること三年、神道の奥義をも極めた禪傑であるが、その逢着する所の眞理は、是の如く神佛兩道全く一如にして、水乳分つべからざるものであつた。

東嶺は更に次の一語を以て、其の説を結ぶ。「當知神乘佛法同一理體。但是不出見性一法。」これ絶對不動なる國體の本源であり、涅槃寂靜法印として、神乘佛道全く同一理體を示すものである。天に二日なく眞理に二途なく、全く同一理體の分つべからざるものであるが、只其の傳統の歴史に於て、或は表裏の如く、或は本迹の如く、或は兩鏡相照すが如き妙趣を顯現するのである。

されば元弘三年、鎌倉幕府倒壞の後、後醍醐天皇には、相摸に隱遁せる夢窓國師の下に、「王法佛法併び昌んなるの時節、旁々相見の志深し。いそぎ上洛せしめ給ふ可き」優渥なる論旨を賜はつて居る。

心佛及衆生是三無差別とは、由來華嚴の所説であるが、心佛及神是三無差別こそ、我が興禪護國の玄旨であらねばならぬ。「四十二章經に云く、爾の時世尊既に成道し已つて是の思惟を作し給ふ。離欲寂靜を最も勝れたりと爲し、大禪定に住して諸の魔道を降し、法輪を轉じて衆生を度すと。遺教經に云く、此の戒に依因すれば、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得と。是に知んぬ。禪力に非ずんば一切の惡破し難きことを。仍つて此の宗を以て鎮護の大要とするのみ。」と言ふ榮西が興禪護國の論旨の如きは猶靴を隔て、痒を搔くに似たるものがある。

興禪は即興神道であり、興佛法は即興王法である。天心の妙諦は只是見性の一途によつてのみ證入し得るのである。此處に至つては、拜神は即禮佛であり、禮佛は即拜神であり、天日嗣であらせられる 天皇陛下に歸一し上ることは即歸依三法であり、其の間吾人は一點の矛盾を感じないものである。

吉田松陰は其の晩年、獄中より其の門生に書を與へて、「天照の神勅に、日嗣之隆與天壤無窮と有之候處、神勅の相違なければ日本は未だ亡びず。日本未だ亡びざれば、正氣重ねて發生の時は必ずある也。只今の時勢に頓着するは神勅を疑ふの罪輕からざる也」と、教誡して居る。

「視此寶鏡當猶視吾」との神勅、同じく昭々として明かではないか。然るに此の寶鏡を視上ること、模糊曖昧として何事のお在しますか知らざるに到つては、神勅を輕んずるの罪淺からざるものがある。然らば此の寶鏡を視上る底の人果して能く幾人かあるであらう。唯見性の一法のみよく之を成し得るとするならば、興禪こそ實に唯一の神道であり、無二の神祭である。興禪に依つてのみよく神慮に添ひ上り、王法を倍々昌んらしめ上り、國家をして磐石の安さにおくことが出来るのである。

「吾ば子々孫々宜しく吾が所思を知るべし。當寺繁昌せば蘿圖永へに固く、玉葉久しく茂らん」と龜山上皇が南禪寺建立の願文に仰せありしものは、蓋し此の意であらう。

一日大燈國師參内の序、花園法皇には御蓆を一枚除かせられて御對座、「佛法不思議、王法に對坐す」と、綸言あらせられた。かしこくも遙に天照大神より天下統治の天心を傳持し給へる、日嗣の天子に今對坐し上る者は、實に遠く釋迦牟尼世尊より、嫡々佛心を擔承し來れる傳燈の祖師であつた。寔に兩鏡相對して中に影像なきが如く、聖代の瑞祥之に過ぐるものはなかつた。國師は恭しく膝を進めて「王法不思議、佛法に對坐す」と奉答し上つたことであつた。

(了)